

## 第四百十六 白粉問題

愈よ當日となりぬ、廣海子爵に招待せられたる中川兄妹は時刻を測りて外出の仕度をなさんとするに妹のお登和嬢窃に懸念する所ありけむ兄の側へ來りて羞しそうに「兄さん、妙な事を伺ふ様ですが今日は白粉を着けて参つては悪う御座いませうか」中川「何故」妹「それでも近頃は世間に大層白粉廢止論が盛んで女が白粉を着けるとさも悪い事をする様に申しますもの」中川「アハ、それは飛んでも無い事を苦勞する、世間で唱へるのは白粉廢止論では無い、鉛毒禁止論だ、鉛分の多い白粉を顔へ塗つてそれが為めに身體を害するのは愚の至り、鉛毒は何處までも禁止しなければならん、然し和女の用ゆる白粉は鉛分が無から構はんでないか」妹「ですけれどもネ、世間で言ふのは極端な白粉禁止論で多くの學校では生徒に禁じた處もある様です」中川「それは無論禁ずるが至當だ、學校の教場へ出て勉強する時何の必要があつて白粉を着ける、私の意見で言ふと女學校内では白粉計りで無く絹の衣服まで一切嚴禁して宜いと思ふ、何となれば金滿家の娘が絹物を着て白粉を着けて教場へ出ると貧乏人の娘はそれを羨む心が出るし嫉む心も出る、學業の事は餘所にして衣服の品評を學校でする様になると非常に學校の風紀を亂す、娘と云ふ資格で人の家へお客に行く時と生徒と云ふ資格で學校へ出る時とは其覺悟が違はなければならん、譬へば兵隊となつて軍紀に服従する時と家に居て一家の主人となつた時と男の覺悟が違ふ様なものだ、男の學校でも服制を一定して貧富貴賤の別を立てない處も多い、兵隊も皆な一定の服装をなして居る、それと同様に女學校も服制を一定させて教場へ出る時は木綿の紋付に海老茶の袴とでも極たら大に規律を正す事が出来るだらう、女でも學校へ出れば學校の規律に服従して自分勝手な我儘をしないと云ふ習慣を養はなければならん、學校で白粉を禁じるのは至當の事だ」妹「それでは世間の女學生の様に髪をボウ／＼と亂して左右の肩を怒らせて男の様な風をして居るのも構ひますまいか」中川「イヤあれは不可、あれは言語同斷だ、女は何の為に勉學する、女らしい女となる為めに學校教育を受けるのでないか、決して男らしくなるのが女の目的で無い、學

校の方でも女らしい女を作るのが婦人教育の大主眼で無ければならん、或る突飛な學校では女を男らしく仕立てる所もあるけれどもそれは大間違ひの教育で、婦人の本分を知らないのだ、もしもそれと反對に男が女らしくなつたら何と云ふ、男の不具と云ふべきだ、それと同じ様に女が男らしくなつたら女の不具だ、女は何處までも女らしくならなければならん、殊に學校教育を受けて文明の世に立つべき女は、普通の女よりも\*よ優れて女らしくなければならん、女らしいとは何う云ふ事だ、即ち姿も心も美しいと云ふのが女の本分だ、先日玉江さんに美人法の講釋を言つた通り美しいと云ふ事は正しいと云ふ事が土臺になつて、姿も正しく美しく言語應對も正しく美しく心も正しく美しくなければならん、それには平生心の嗜みと同様に身嗜みと云ふ事を忘れてはならん、髪は決して取亂さず、顔も手足も綺麗にして舉動進退が優美に見える様でなければ女らしくないではないか、白粉を着けない時でも絹の衣服を着ない時でも自分の身體から美の光りが現はれる様に心掛けるのが女の嗜みだ、それを今の女學生の中には態々身穢くして髪は亂れ顔は脂ぎつて垢だらけで人と對話する時口から臭い息を吹かける様な人もある、實に恐れる子、男らしいのを通り越して野蠻らしいと云はねばならん、何の為に學問をするか、女の道を學ぶ為めでないか、學問をした為めに女らしく無い人になつたら其學問は人を野蠻界へ引戻すのだ、野蠻人は男女の區別が分らん、文明に進む程女は女らしくなるべきだ」と例に依つて長廣舌が動き出しぬ、

## 第四百十七 美の必要

白粉問題は今の世の婦人が窃に心を惱す所なり、お登和嬢は飽くまでも兄の意見を叩かんとて「兄さん、それでは學校へ出る時を別にして平生白粉は女に必要でせうか」中川「イヤ爾う云ふと少し意味が違ふ、女は心も姿も美しくなければならんが姿を美しくする為めには人に因つて白粉の似合はない事がある、極く色の白い人は白粉を着ける為めに却て其美を損する事がある、古人の詩にも却て嫌ふ脂粉の顔色を汚すと云ふのは其事だ、又たそれと反對に極く色の黒い様な赭い様な人にも似合はない、大原のお代さんが白粉をコテ塗りにして居るが地

の色の赭黒い處へ白粉の上塗りをかけるから双方の配合で一種の鼠色  
 が出来る、顔が鼠色になるのは餘り美しいと言はれん子、アハ、あ  
 んな人は先づ地の色から改良しなければならん、爾ういふ兩方の極端  
 を別にしても人に因つては淡化粧の似合ふ事もあるし、濃い化粧の似  
 合ふ事もある、丁度地味な衣服の似合ふ人と派手な衣服の似合ふ人と  
 がある通りだ、譬へば同じ様な草花を畫に描いても蘭は墨畫で描いて  
 立派に見えるが水仙は墨畫で描くと蘭の化物の様になつて一向引立た  
 ない、女も其の通りで墨畫仕立が似合ふ人もあるし、彩色仕立の似合  
 ふ人がある、歸する處女は自分の姿を美しくする為めに一番よく似  
 合ふ處を知るのが肝腎だ、縦縞の衣服が好いと云つても背の矮い人に  
 似合はず横縞は背の高い人に似合はん、髪を結つても長い顔の人は鬢  
 が膨れないと顔の釣合ひが取れず、半襟をかけてもよく映る色と映ら  
 ない色がある、白粉も其の通りで人により場合によつて必要なことも  
 あらうし、必要で無いこともあらう、白粉の外に一層美術的の化粧品  
 が出来たら白粉は無用の長物になる、だから和女の言ふ様に白粉が女  
 に必要なとは言へない、我が姿を美しくする事が女に必要なので、白粉  
 は畢竟その一材料に過ぎない」お登和嬢「然し子、今の人はよく斯う  
 申します、女は天真爛漫が良い、化粧したり着飾つたりするのは偽り  
 の姿だと斯う云ふ説があります」中川「その天真爛漫説が人生の事を  
 誤る、今の世は何事にも天真説や自然説が行はれて害毒を天下に流す、  
 天真とは生れた儘と云ふ事だ、女の美は天真に在りと云たら裸體にし  
 て置のが一番良からう、髪を結んでは天真に乖く、花やかな衣服を着  
 ても天真に乖く、化粧をしても天真に乖く、亜弗利加土人の様に裸體  
 で居る女が天真に違ひ無いと斯う云はねばならん、然し今の人だつて  
 それ程極端な天真説を唱へるのではあるまいが衣服は美しい物を纏ふ  
 が宜し、髪も結ぶが宜し、但顔計りは天真を保存させ度いと云ふのだ  
 らう、ところで其人に向つて印度人の顔の黒いのも天真だ、お代さん  
 の色の赭いのも天真だがあれは如何ですと聞いたら矢つ張り閉口して  
 モット美麗な天真が良いと云だらう、つまり天真の美が良いと云ふの  
 だ、玉ならば磨かない明玉が良と云ふ、然に不幸にして磨かざる明玉  
 は天下に無い、婦人も磨かざる美は滅多に無い、搗米屋の娘に色の白  
 い人があつたら平生米糠が顔へか、つて自然に夫で磨けるのだ、箱根  
 の温泉場に色の白い女があれば温泉の化學作用でいつの間にか磨ける

のだ、假りに一步を譲つて磨いた美はまだ天眞の部に屬する、白粉は天眞で無いと云つたら西洋美人の様にクリームを白粉下に塗つて肌の色と同じ白粉を塗つて天眞の色が不天眞か分らない人に逢たら何とする、天眞だと信じて居る時は大層悦んで、化粧をして居ると分つたらば俄に却走するか知らん、西洋には石鹼で顔を洗ふと白粉を着けたと同様になるのもある、その石鹼を使つたら手拭で拭かない、つまり石鹼の水を塗る様な者だ、それ等は天眞の部だらうか不天眞の部だらうか」と講釋も中々六か敷し

## 第四百十八 程と加減

お登和嬢も亦た斯る問題を研究するに熱心なり「ですが子兄さん、餘り天眞に過ぎて何でも剥き出しと云ふのは感心しませんけれども去りとて餘り飾り過ぎて天眞を失つたのも偽りの姿になりはしませんか」中川「それは和女にも似合はない事を云ふ、其處には程と加減があるではないか、譬へば牛肉は天眞の味を貴ぶと云つて生嚙りにしたら美味しくない、と云つて餘りに外の物を混じて牛肉の味が野菜の味に消されて了ふ様では料理の甲斐が無い、味を付けるにも甘過ぎてならず鹹過ぎてならず、甘いと鹹いの眞中で丁度良い味を出すと云ふ程がある、天眞の味と人工の味とを配合させる加減がある、女が我身を美しくするのも其通りで、天眞を失はない様に即ち偽りとならない迄の範圍内で丁度宜い程を知るのが肝腎だ、天眞と修飾との加減を悟らなければならん、何事にも程加減と云ふ事が一番大切だ、姿勢りで無い心を美しくする時でも其通り、人の心は天眞が良いと云つて怒り度い事に怒る、笑い度い時に笑ふとしたら所謂る感情任せで野蠻人だ、人で云へば二三歳の小兒だ、その感情を修め慎んで何事も道理に適ふ様にと身を處置するのが人たるの道でないか、然るにその程を通り越して怒り度い時に笑つて見せる悦ぶ時に悲んで見せると即ち偽りの情を現はす様では矢つ張り悪い、そこにも程加減と云ふ事が必要で天眞を失はず感情に任せずと云ふ中道を行かねばならん、殊に女は姿も心も極端に走つては困る、快活が宜いと云ふと直きにお轉婆突飛になり度がり、静肅が宜いと云ふと因循無氣力になり度がる、言葉は明諒で人に

逢つても應對を爽にせねばならんと云ふと餘計なお饒舌りになり度がある、お饒舌が悪いと云ふと必要な場合に口も利けなくなると斯う云ふ風では仕様が無い、その程加減を悟るのが女の第一に心掛くべき事だ、白粉が悪いと云ふと人の家へ招待された時でも白粉を着けてはなるまいかと和女のように心配する人も出来る、白粉が善いと云ふとコテ塗りにして學校の教場へ出る様な不心得者も出来る、何でも時と場合を考へて其の程に合ふ様にしなければならん、女は心と姿とを同じ様に美しくすべきものだが、もしも一方に偏して心さへ美しければ姿は何うでも構はんと云つたら女の本文を忘れる、之に反して姿を美しくすれば心は問ふに足らぬとも言へまい、姿を飾るにも貧乏な娘が金満家の眞似をしたら身分不相應に見えて所謂程を失ふだらう、衣服を着るにも程がある、白粉を着けるにも程がある、御馳走を食べるにも程がある、口を利くにも程がある、女は何處までも女らしいと云ふ程を知らねばならん、姿計りで無い、口から出る言葉でも筆で書く文章でも女らしくなければならん、先日或る雑誌を讀んだら女の筆で男の不誠實を責めた文章の中に我れ其面に唾せんと欲すと云ふ句があつた、女の言葉としては如何にも程を過ぎて居る、學者だか才女だか知らない、其面に唾すると云ふ様な文字を使ふのは男の筆としても穩でない、女の筆なら女らしく淺まし、とかうたてしとか書けばそれで充分に意味も通じるでないか、今の女秀才には往々斯んな弊がある、女學生が男らしくなつて困るのは爾ういふ眞似をするからだ、もつと甚しいのは外の女の書いた文章の中に屁つぴり虫と云ふ文字があつた、實に言語同斷さ子」と今の世に生れたる者は往々斯る事を見聞するの苦痛あり、ア、苦痛なる哉、

## 第四百十九 女子教育

今の世は過度の時代なり、何事も極端のみ行はれて中道を行くもの寡なし、中川は其事を歎息しけむ事に觸て我が妹を戒しむる「お登和や、和女は幸に料理の事を研究して居るから程や加減と云ふ事も分るが、今の世の人は兎角何事も極端な意見を抱いて實用に適しない事を言ふ、人の身體には滋養分が必要だと云ふと無闇に大食をして大食病になる、

それと反對に過食して胃腹を害すと云ふと無闇に少食をして畏食病になる、大食で無く少食で無く自分の身體に適當した營養分を我が體中へ吸収させるのが家庭料理の目的だ、それが為めには西洋料理の長處も取るし、支那料理の長處も取るし、日本料理の長處も取つて最も進歩した家庭料理を作り出さなければならん、婦人教育も其の通り、和漢洋の長處を取つて最も進歩した婦人を作り出すのが今の世の目的であらうけれども往々にして其の目的と反對した手段を取つて居るものがある、最も進歩した婦人とは最も女らしい婦人の事だ、娘となつては淑女、妻となつては良妻、母となつては賢母、是れが女らしい婦人でないか、何處の國でも女らしく無い婦人を悦ぶ人はあるまい、然るに近頃の女子教育は動ともすると女らしく無い婦人を製造する、男女同權とか自由結婚とか女の神聖とか自然の戀愛とか云ふ突飛な事計り唱へて口と筆とは達者になるけれども家に居れば親に計り逆らうし、お嫁に往つて惣菜料理一つ作る事は出來ず、子を産んで子供の衣服も縫ふ事の出來ない様な婦人を澤山製造する、それ等は全く女を不具者に仕立てるのだ子、殊に近頃の婦人社會は昔の抑制主義を矯め直す積りであらうが、盛に婦人の獨立とか神聖とか理想とか云ふ事を唱へる為めに所謂の程と加減を通り越して女の心掛が大層生意氣になつた、生意氣は最も女の慎むべき惡質だが多くは其病氣に罹つて居る、婦人を冷遇する男子があると忽ち神聖論を擔き出して我れ其面に唾せんと欲すと云ふ様な事を言ふ、それが為めに愈よ冷遇される結果になる、少しでも氣に入らん事があると口と筆とを以て誰にでも突掛る、心の嗜みも無ければ身の嗜みも無い、丸でだ、つ子の通りだ、爾う云ふ人がお嫁に往つて少し姑が嚴しいとか或は良人が小言でも言ふとヤレ壓制だの舊弊だのと直ぐに反抗心を起す、社會へ出て交際しても自分の心に逆らふものは直ぐ惡魔の様に罵倒する、いかにも女らしく無い子、いかにも生意氣だ子、女の心の美しいと云ふ事は正しい道を行くのが土臺になつて一方には快活の點も無ければならんが一方には從順の點も無ければならん、勇氣も無ければならんが耐忍も無ければならん、又姿の美しいと云ふ事は顔や形が美麗と云ふ計りで無く、言葉も丁寧で行儀が良くつて折目正しい中に優しい處があり、素直な中に確りした所が見えなければならん、丁度食物には甘味も鹹味も酸味も適度に配合されて初めて美味になる様なものだ、それを女の心も姿も單調單

味の極端に走つて自分の氣に入らない事は親にでも良人にでも姑にでも社會にでも誰にでも突かゝると云ふ様になつては唐辛計りのお料理が出来たので、程も加減もあつたもので無い、婦人の美質は就方かと云ふと甘味の多い方が宜い、然るに今の世の女秀才や女學者に接すると先づピリ、とした辛味を感じる子、女らしい閑雅温籍圓滿の點が無くして何となくトゲ／＼して居る、それから突飛なる女學生に至つては辛味の外に苦味を感じるネ、アハ、冗談では無いよ、外の人もよく爾う云ふではないか、實に苦々しいと、苦々しいとは苦味を感じる證據だ、お嫁を貰ふ人が女學生お斷はりと云ふ様になつたのも全くその苦味の中毒を畏れるからだ、女は何事にも程と加減を忘れてはならん、女子教育に従事するものは女の本分と其の本分を實行する程と加減を教へるのが第一の必要だ、譬へば家庭料理を教へるのに鹽と砂糖で食物の味をつけると云ふのは誰にでも解るが鹽を何程入れて砂糖を何程容れて丁度好いと云ふ加減を教へるのが肝要だ、習ふ方も其加減を覚えなければ何の役に立たない、然るに今の婦人教育は學問上の知識計り教へ度がつて女子の本分と其實行方法を教へないから、丁度鹽と砂糖の講釋に計り偏して更に其調合加減を教へない様なものだ、譬へて云へばヤレ鹽は斯うして製造する、天日製鹽は斯うである、楮穗鹽は何うして焼く、砂糖には甘菜糖と甘蔗糖とあつて其製法は何うだと云ふ様な最も實用に遠い知識計り女生徒の頭へ詰め込んでその使用法を教へない為めイザ料理をしやうと云ふ時講釋計り上手でも吸物一つ作る事が出来ないと云ふ様な有様だ、筆を持てば男子の責任論を滔々と書いても庖丁を持つて大根が一つ斫れないと云ふ始末だ、男子の學校教育にも往々其弊があるけれども殊に婦人教育は甚しい、と云つて全く高尚な智識を捨てると言はないがそこにも程と加減がある、兎に角今の婦人教育は最も實用に遠いと評せざるを得ない、和女は幸ひ實用に近い事を先へ習つたから何處へ出しても女らしい娘と見えるが白粉廢止論の爲めに心配を始める様ではまだ心が確だと云へない、白粉を着けるにも程がある、お化粧するにも程がある、和女に一番似合ふ程を考へて何處までも女らしくお作りなさい」と妹に諭して身支度をなさしむる時小山夫婦相携へて入り來れり、

## 第五百十 妻の任

小山夫婦も廣海家へ赴かんとする途すがら中川兄妹を誘はんとて立寄りしなり、親友の家とて夫婦はツカノ座敷へ入り「中川君、今日はお登和さんもお出かけだらう子、僕は君と大原君と三人だけが招待される事と思つたが昨日玉江嬢が来て是非僕のワイフにも来て呉れる、お登和さんをお招き申すのだからと云ふ譯で連れて来た、お登和さんのお支度は出来ましたか子」と次の間を差覗くにお登和嬢は今鏡に向ひてお化粧の最中なり、小山の妻君驚ける風に「オやお登和さんは白粉をお着けなさいますか」と敷居越しに顔を出す、お登和嬢今は心に疚しき所無し「ハイ」と笑ひながら眉刷にて顔の周圍を擦つて居る、中川は妻君の様子を見て是も亦た白粉廢止論にかぶれたなど可笑しくなり「奥さん、貴女はなぜおしまひをなさいません」妻君「だつても貴君、白粉廢止論が盛ではありませんか、私は娘の時分から白粉なんぞを着けることが嫌ひでしたけれども良人が着ける／＼と申しますから仕方が無くて折々着けた事もあります、此頃白粉廢止論が出たのでソレ御覽なさいと申しました」中川「アハ、いかにも貴女なら爾うありそうな事です、娘の時分にお嫌いひでもお嫁入の日には素顔でいらつしやいましたか」妻君、「オホ、其時は着けました」中川「爾うでせう、女は誰でも場合によつて是非白粉を着けなければならんと云ふ必要が起ります、それに娘の時代は自分の好き嫌ひで勝手にしても構ひませんけれども御婚禮の濟んだ後は良人に對する務めがあります、白粉を着けるのが務めと云ふ譯でありませんが妻は我心と姿を美しくして良人を悦ばしめるのが第一の務めです、昔の教にも女は寝顔を良人に見せるなど云ふ位で、取亂した姿を良人に見せるのは女の恥辱としたものです、西洋の諺にも妻の部屋を覗く良人は愚なりと申ます、態々好で取亂した妻の姿を窺ふのは馬鹿であると云ふ事です、人の妻となつては良人に對して身嗜みと心の嗜みとを忘れてはなりません、家庭の幸福はそれから生じるのです、と申して水呑百姓の女房がお化粧計りして耕作の事を手傳はなかつたら百姓の妻たるに適しませんけれどもそれは良人を悦ばしめる場合が違ふからです、人の妻となつては良人の資格に依つて其覺悟を定めなければなりません、軍人の妻となれば良人が飽くまでも天皇陛下に忠節を盡す様と心がけて平生

其の覺悟を以て良人に勤めなければなりませんまい、軍人の妻になつてヤレ貧乏だの贅澤が出来ないと愚痴を言ふ人がありますけれどそれは自分が悪いので軍人の妻になつたものと大商人の妻になつたものと其覺悟が違はなければならん筈です、學者の妻となつて商人の妻を羨むのも愚ですし、商人の妻が政治家の妻たらんと欲しても間違ひです、然し誰の妻となつても女は心と姿を美しくして良人を樂ましめると云ふ大責任に差別はありません、只其責任を實行するに就て時と場合で程や加減が違ふ計です」と頻に妻の責任を説く良人の小山大悦び「中川君、モット早く其説を僕のワイフに聞せて貰ひ度かつた」